

社会に起るさまざまな現象を捉えるための手法として社会調査がある。私たちが生きている社会は手にとって触れることも、目で見てまじまじと観察することもできない。しかしながら、社会の実態を明らかにし、そこにどのような問題や課題があるのか、その解決策を考えていかなければならない。そのためには、さまざまなデータを収集していくことが重要だ。

社会調査にはいくつもの手法が確立されているが、同一の対象者に繰り返し調

人生の歩みを追いかけるパネル調査

えるためには、調査を繰り返しておこなって比較するとよい。しかし、調査ごとに対象者が入れ替わってしまうと、なにかの変化がみられたときに、対象者が入れ替わったことによる変化なのかどうか厳密には判別できない。こうした限界に対して、同じ対象者に繰り返し調査をおこなえば、変化をより明確に捉えられ、因果関係も解明しやすい。急速な少子高齢化、大きく変動する労働市場、景気の低迷など社会環境が大きく変化するなかで、人々はどうのように選択や行動をしているのか。そこにはどのような要因が影響を与えているのか。それを明らかにするためにパネル調査が有

配偶者・パートナーにも調査を実施している。言い換えれば、1986生まれと1987年生まれのプロスト就職氷河期世代の人生の歩みを多層的に追いかけているのだ。

ポスト氷河期世代の

子育てを巡る

用だ。

私は4年前から、東京大学社会科学研究所がおこなうパネル調査プロジェクトの一つ「高卒パネル調査」に参画している。この調査は2004年3月に高校を卒業した人々を20年にわたって追跡してきたものだ。最初の調査に回答した7563人のうち、追跡調査への協力を了承してくれた協力者にほぼ毎年アンケート調査を実施している。さらには調査協力者の保護者や

若い頃になどどのような経験をした人かどのような親になるのか。この問いをパネル調査で得られたデータを元に探りたい。私はこれまでギャル系のファッションを好む母親、いわゆる「ギャルママ」を研究してきた。ギャルママの子育て実践をみていくなかでわかったことは、彼女たちが自らの経験、とりわけ学校での経験をふまえた上で子どもの教育について考えていることだ。こうしたギャルママの姿は親自身の経験が子育ての場面において参照されるということを示唆している。親自身の経験が子育てに影響を及ぼすことは既に指摘されているものの、過去の経験については懐古的なデータである場合が多い。一方、パネルデータであれば、過去のリアルなデータを用いることができる。これまで私が研究してきたギャルママは奇しくも「高卒パネル調査」の対象者と同じポスト氷河期世代だ。まもなく40歳代に突入するポスト就職氷河期の人々がどのように次世代を産み育てていくのか。今後も継続して精緻なパネルデータを蓄積しつつ、人々の人生の選択とそこに影響を及ぼすメカニズムを探っていく。



名城大学・人間学部助教
高橋 香苗

たかはし・かなえ 家族社会学。明治大学大学院情報コミュニケーション研究科博士後期課程修了。博士（情報コミュニケーション学）。1989年生まれ。

